

自由を求め、不自由とたたかう

（令和六年度寄稿） 中頼別町・中頼別中

校長 小林 清一

若い頃、生徒会の担当をすることが多かった。生徒達は、校則に異議を唱え、「自由」がほしいとよく言っていた。「自由」には、「責任」が伴うんだぞ。と理論武装しながら、生徒たちとの折り合いを考えながら、落としどころを探るような話し合いをしたことを思い出す。そもそも「自由」という言葉を作ったのは福沢諭吉だっただろうか。聞きかじりでは、「自由」とは「自分をよしとすることであり、精神的な決断を表していると覚えている」。

数年前、病に襲われ、右上肢を失った。美術教師であつた自分にとって、この出来事は文字通り大きな痛手となった。だが、その後も管理職として教職を続けられていることを本当に喜ばしく思う。そうしてまもなくゴールにたどりつけそうなので、そこは充実感を感じている。

今では稚拙ながら、左手で文字や絵を描けるようになった。ただ、まだ不満足なことがある。それは学生の頃から趣味で続けてきたギターがうまく弾けないことである。身体的な「不自由」を「自由」に解放するには、そのハードルはとも高い。精神的な「不自由」と身体的な「不自由」では、比べることはできないかもしれないが、その克服への取り組みはいかなるものであろうか。それぞれが置かれている状況や程度、環境や支援など、さまざまなものによってその壁は異なるものだと思うが、そこへの「たたかい」を求める人には、何らかのかたちで応援したいと思う。

手術を終えて、教育現場に戻ったとき、生徒たちとの対面に当たっては全校集会を開いていただいた。そこで話をさせていただいたのは、確かに「不自由」になってしまったかもしれないが、決して自分が「不幸」だとは思っていない。今後ともあきらめない心を大切に、粘り強く挑戦しながら生きていきたい。と左手で描いた絵を配りながら伝えさせていただいた。

左手でコードを押さえることは出来る。右手にパイプを装着して、手ごろな位置にピックを接着する。こうすることで、何とかストロークを弾くことが出来るようになった。まだまだギクシャクしているが、小さな「不自由」とのたたかいが始まった。

尾崎豊にボブディラン、ギターを弾いて歌いたい名曲がたくさんある。



小林清一氏がこよなく愛した風景【宗谷校長会会誌の表紙にも掲載】